



Uターンという選択

外での経験を糧に、家業と結城の未来をつむぐ



「いつかは家業を継ぐ」。幼い頃から自然と思っていたことでした。しかし、一度は外の世界で経験を積もうと、大学卒業後はテーマパークに就職。売上管理や人材育成を学んだ後、福島県いわき市を拠点とするイベント会社に転職しました。地方創生や震災復興に関わるプロジェクトに携わり、地域の力、文化の価値を体感しました。そして令和5年、結城へのUターンを決意。現在は、家業である畳店で6代目として働きながら、国家資格である「畳製作技能士」取得のため日々邁進しています。

帰郷して最初に感じたのは、同世代の若者が少ないこと。私と同じように家業がある同級生がいましたが、大学進学などを機に都市部で暮らしている人が多く、少し寂しさもありました。しかし、その一方で、地域を元気にしようと奔走する親世代の方々がたくさんいて、父を介して地域イベントやまちづくりに関わる機会も増えてきました。外で得た視点を活かし、地域の議論にも新しい風を吹き込めているのではないかと感じています。

結城市は、歴史と文化が息づくまち。国の重要無形文化財にも指定されている「結城紬」は、まさに世界に誇れる伝統工芸です。近年では、天下三名槍である「御手杵」ゆかりの地としても注目されており、安土・桃山時代の慶長3(1598)年ごろに結城氏18代・秀康によって作られた「城下町のまち割り」は、現在も北部市街地に残っています。

このような個性豊かな地域資源が、結城の魅力であり、まちのブランディングにも活かせるポイントだと思っています。

また、人と人とのつながりが濃いのもこのまちの魅力。「立堀さんの息子さんね」と声をかけられるような関係性が残っていて、地域全体で互いに支え合う風土があります。顔が見える関係性の中で信頼を築き、仕事を進めていけるのは、とてもありがたいことだと感じています。

畳の仕事を通して、結城の伝統と暮らしを未来につなぐこと。そして若い世代として、地域に新しい風を吹き込み、誰かが帰ってきたくなくなるようなまちをつくること。そんな思いを胸に、今日も畳に向き合い、地域とともに歩んでいます。

特集 結城という選択 — わたしと結城の物語 —

立堀 智一さん
立堀畳店

—PROFILE—

結城市で育ち、大学卒業後、千葉県で就職。令和元年から福島県でイベント会社に勤務。令和5年に家業を継ぐためUターン。

立堀さんの

好きなイベント



祭りゆうさ

結城の一大イベント。ダンスだけでなく、子どもからお年寄りまで多くの方が楽しめる企画が盛りだくさんです。